

駆け出し
ベンチャー
キャピタリスト
奮闘日記

【第18回】

〇月〇日

午後7時になって、ようやく会場に到着。丸いテーブルが7つほど用意されていて、各テーブルには5~6人が囲んで座れるように椅子が配置されていた。テーブル中央に食べ物が置いてある。開会の挨拶を待つ人の中には、アルコール入りの水を補給している姿もちらほら。

これから始まるイベントは、藤エニーズさん主催のビジネス交流会だ。同社は「キャリリスト」と呼ばれる、「顧客のキャラクターを生かしたライフスタイル全般のアドバイザー」を育成している。キャリリストは資格であり、誰でもなれるというわけではないし、初級・中級・上級といったクラス分けもあることから、本格的な職業とも言える。

やがて開会の挨拶が終わり、それぞれのテーブルがそれぞれの話

古い業界から学ぶ 新しい経営

題で盛り上がる。私のテーブルは、起業家が数人と私、そしてキャリリストが2人という顔ぶれ。キャリリストの方々からは、将来の夢へかける情熱を分けていただいた気がする。

エニーズさんの大目的は、国民に認められる女性の新しい職業を創造すること。今日の交流会も、そんなメッセージを伝えるためのイベントの一つ。毎回、エニーズクラブの会員の中から様々な業界のゲストをお迎えして、トークタイムを設定している。KI選手日本代表や早稲田大学教授も会員とか。今回のゲストは着物研究家の三宅てる乃先生だった。

どんなお話をされるのか、興味津々で耳を澄ました。5分と聞かないうちに、「三宅先生のお話は奥が深い」と直感。お話は文化が経済と密接な関係を持つことにまで及んだ。

——着物業界は古い体質から完全には抜け出すことができていない。時代にそぐわない商慣行・思考

形式に縛られて、身動きが取れない状態になっている。たとえば、一般の人が着物を着ようと思えば、お店や美容院にわざわざ出向いた上に着付け手数料まで支払わないといけないという実態がある。着物業界の人はこれを深刻に受け止め、打開策を真剣に検討している。しかしながら、決定的な解決策はまだ見出せていない——。

既存の技術や考え方に縛られていては、ベンチャーは成功しない。その意味で、三宅先生のお話は、着物だけにとどまらず、広くベンチャー一般に敷衍（ふえん）されうる。

帰り道、夜風に吹かれてハッと気づく。この交流会を開催して下さったエニーズさんに感謝せねばということに。爽やかな感謝の余韻に浸りながら、私は電車に乗り込んだ。

（国師 直＝フューチャーベンチャーキャピタル、s-kunishi@fvc.co.jp）